

國學院大學學術情報リポジトリ

発題5知的自律と自己の発達を支援する初年次教育の
取組(平成二十四年度國學院大學人間開発学会第四回
大会公開シンポジウム：
学生の可能性を引き出す初年次教育)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井下, 千以子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00001241

発題⑤

知的自律と自己の発達を支援する初年次教育の取組

井下 千以子

桜美林大学の井下でございます。きょうは貴重な機会にお招きをいただきまして、ありがとうございます。私も一緒に学ばせていただくというつもりで、お話しさせていただきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

知的自律と自己の発達を支援する初年次教育の取組みということでお話しして参りたいと存じますが、自律ということについて一言、ご説明します。この自律にしましたのは、もちろんディベロップメントの自立の意味もあるのですが、自分を律する、コントロールするという意味も込めて、この自律にしました。

まず、桜美林大学について少しご説明したいと思います。桜美林大学は二〇〇七年度に学群制に移行し、リベラル・アーツ学群が誕生しました。人文科学、社会科学、自然科学、学際統合科学という四つの分野で構成されています。一学年一〇〇〇名です。一方、プロフェッショナル・アーツとして三つの学群があります。プロフェッショナル・アーツは三つの学群を合わせて、一年生が大体一〇〇〇名、一学年が二〇〇〇名で、大学としては八〇〇〇名、幼稚園と中高を合わせて、おおよそ一万人の学園ということになります。

このリベラル・アーツ学群が立ち上がる一年前に基盤教育セ

ンターができ、学群が立ち上がったあと、その基礎教育を支援していく基盤教育院ができました。

まず、私が初年次教育の授業をどうデザインしてきたかということを知っていただくために、簡単に自己紹介をさせていただきます。

桜美林大学では教員は学系に所属をして、各教育組織に教えるにいくという方式を取っています。私は心理・教育学系に所属をして、大学院では、大学職員のための大学院がありまして、大学アドミニストレーション研究科では学生支援論を担当しています。リベラル・アーツ学群では、生涯発達心理学や教育心理学などを担当しています。基盤教育院では、「大学での学びと経験」という初年次支援科目を担当しています。大学での学び方を学び、初年次からキャリアを支援する科目として開発してきました。この科目の開発に携わってから、心理学研究の中に、大学教育研究ということが加わり、その成果を大学教育学会や初年次教育学会で発表するようになりました。現在は、大学教育学会と初年次教育学会の理事をしています。

研究においても、授業においても、最も大切にしていることは「思考を育てること」ということです。その思考を育てる手立

てとしてのライティング教育を充実させていくことが重要だと思っています。考える力を育てることが、考え抜いて書くことが、人を育てる、それがヒューマン・ディベロップメントとながると考えてきました。

先ほど、新富学部長からお話を伺い、まさしく「人間開発学」と通ずるところがあると思いました。人間開発、人間発達というのを専門としてきました。青年期にある学生たちが、自己を確立していく上で、思考を鍛え、そして、思考を鍛えていくための一つの手だてとして、書く力を鍛えていくことが大学教育においては重要なのではないかということ、実践を通してこれまでやってまいりました。

実践としては、慶応義塾大学で学部の留学生の日本語を担当して、十五年になります。主に中国系と韓国系ですが、日本語力はネイティブと同等か、それ以上の力があります。動機づけも高い学生たちです。いわゆる外国人のための日本語の授業は彼らには必要としないので、大学で学ぶべき日本語の力をつけるためにはどういう授業がいいのだろうかということ、彼らによって鍛えられることで、授業を充実させることができていると思っています。思考の発達の研究とライティング教育は、そこでつながりました。

きょうはライティング教育の話ではなく、初年次教育の話だと思いましたが、レジュメにはライティングの話を書き載せなかったのですが、成田先生が、拙著『大学における書く力考える力―認知心理学の知見をもとに』を読んでもくださり、ここに持ってきてくださったので、お借りして、少し、その内容をお話ししたいと思います。

この本は理論編と実践編から成っています。実践編では、これまで担当してきた授業を紹介しています。慶応義塾大学での「考えるプロセスを支援する文章表現指導」。それから、京大大学での「大学における学びの探求」という授業。ここでは「議論を支援する」ことを通して書くことを充実させる指導をおこなって参りました。また、京都大学の大学院の教育学研究科でも四年間ほど論文作成演習を担当しました。そのクラスでは現役の高校の先生や教育関係の社会人大学院生が学んでいました。集中講義で何度か京都に足を運ぶという形で授業を行いました。日常の教育実践をどのように論文として書き込んでいくか。研究者が研究のために書くに研究論文ではなくて、自分が教育の場に戻った時に活かせる研究とは何か、論文の書き方はどうなるかということ、院生の皆さんと一緒に私も学ばせていただいた経験も書いています。それから、応用的な研究として、思考を育てる看護記録教育の研究とあります。これも私の大事な分野で、それについてもここにも書いています。この本は大学教育学会の奨励賞を受賞した論文を理論編では軸としていますが。それをもとに、桜美林大学の学術出版助成を得て作った本なので、決してこの本の宣伝のためのお話ではありません。(笑)

まず、はじめに、初年次教育の現状ということからお話ししたいと思います。先ほど、赤井学長先生からお話がありましたように、本当に多様な選抜方式によって、多様な学生が入学してきます。それを受けて初年次教育は急激な勢いで普及してきました。普及はしたけれども、今、様々な問題を見直す時期、転換の時期に入っているのではないかと思います。きょうのお

話のポイントは、ライティング教育研究とも重なるところがあるのですけれども、その転換の時期において、「ディシプリンと教養」、この二つが鍵になるのではないかと思います。そのことも、赤井学長先生のお話と非常に通ずるところがあると思います、先ほどお話を聞きしていました。

きょうは、これまで私が開発してきたプログラムの経験を踏まえまして、今後の課題、特に、学問導入型の初年次教育を強化していくことと、自己の探求、自己の発達、人間開発ということをどうデザインの中に盛り込んできたか。初年次教育のコースデザインだけでなく、学士課程四年間にわたるカリキュラムデザインが重要なのではないかとこの話をしていきたいと思えます。

先ほど、お話ししました「大学での学びと経験」という授業は、選択必修科目です。全学共通科目でもあり、初年度は一年生だけだったのですが、今は二年生以上、つまり三、四年生もこの授業を履修しています。

先ほど学生数の話で、関西国際大学では一クラス三十名という話でしたが、制限を設けてないのでドンドン膨れ上がってきました、今一クラスが一〇〇名以上になっています。一〇〇名以上で授業を運営するというのは非常に大変なのですが、一生懸命頑張っています。

目的は大学への適応と学び方を学ぶ。それから初年次からのキャリア支援ということで、キャリアを広義の意味でとらえています。つまり、出口での就職斡旋ではなくて、生涯を通じてキャリアを支援する。人間の発達を支援するという意味でのキャリア支援ということで考えています。

目標は「学びの基礎、礎を築く」ということで、四つの力を習得することをめざしています。仲間を理解する力、自分を見つめる力、表現する力、考える力。これも國學院大学の「導入基礎演習」と通じる場所があると思っております。この四つの力を習得することを目的としまして、8つの取り組みをデザインしています。

自己紹介、他己紹介。お互いを理解するという意味で、名刺を作ってお互いに交換し合う名刺交換会。上級生からのメッセージということで、クラスに上級生や卒業した学生とか院生とかにも来てもらって話をしてもらっています。

それからすべてのクラスではありませんが、事務職員の方に来ていただいて、メッセージをいただくこともあります。大学で働くとはどういうことなのか、あるいは社会で働くとはどういうことなのか、あるいは大学は教員と学生だけではなく職員によって成り立っている。履修ガイドを作っているのは職員だということが学生の意識にはないですね。なんとなく目の前に履修ガイドができていて、自分たちに手元にあると思っていながら、それはもう徹夜をして、教務課の職員が作っているということに初めて学生が気付いたというようなこともあり、そういうことから大学への帰属意識も芽生えていくということもあります。

それから桜美林グラフィティ。これは何かといいますと、初年次から調査法を学ぶということで、小型の使い捨てカメラを持たせまして、自分の大学について調べるといって大きなテーマのもとに、小さなテーマを設定して、例えば「大学で最もやりたいことは何か」というテーマを立て、インタビューします。

用紙一枚に、例えば「英会話をうまくやりたい」、それに学群と学年と名前を書いてもらって、その用紙を持ってもらい、顔写真をパチリと撮るんですね。その写真を今度はKJ法で分類をして、分析させて、ポスターにします。今はパソコンの時代ですけれども（笑）、切り貼りをしてやらせるということで、グループで協力してやらないと時間内にできないというタイムマネジメント力をつけるということもできますし、それからその調査をどのようにデータをまとめるのか。説得力を持ってプレゼンテーションをするにはどうしたらよいかということにも発展する内容になっています。

それから、アカデミック・ライティングとして、レポートを書かせるということもやっています。「小学生に携帯電話を持たせることに賛成か反対か」というようなテーマにし、自分たちの知識や経験をもとに考えられる内容にしています。いきなりアカデミックな内容に入ってしまうと、自分の意見を根拠に基づいて述べることができないので、クリティカル・シンキングができるような形でテーマを設定しています。

さらに、図書館の協力を得まして、情報検索などの仕方も授業の中に取り入れています。それから、将来を考える。これは初年次からのキャリア支援ということで、宮崎駿監督の「耳をすませば」というアニメを使っています。将来が決まっている男の子と自分の将来について何にも決まっていないう女の子との話なんです、それを観て、心理学者エリクソンの流れを引く、マーシャの四つのアイデンティティ・ステイタスを用いて、登場人物のアイデンティティがどう変容していったかを分類させ、ディスカッションをさせるといっています。そし

て、自分自身が高校生のときどうであったか、大学に入ってからどうであったか、四年生になるとどうなるだろうか、あるいは将来25歳ぐらいになるとどういうように、アイデンティティがどう変化するかをイメージさせるということもおこなっています。最後に、ポートフォリオをもとに、学びレポートを書かせるということを行っています。

この取り組みは、二〇〇九年にカナダで開催された国際初年次教育学会で発表してきました。そこには、関西国際大学の濱名学長、初年次教育学会長で同志社大学の山田礼子先生ほか、玉川大学、文教大学の先生方が発表しておられました。

発表は、ポスター形式で、初年次科目の開発した理論的枠組みとデザイン、授業の効果としての授業満足度調査結果をまとめました。たとえば、授業が今後の大学生活にどの程度役立つと思えますか、ということでは、大学生としての自覚を持つ、学ぶ目的を明確にする、学習方法を知る、大学の仕組みを知る、桜美林大学が好きになる、批判的に考える力を養う、表現する力を養う、仲間の考えや気持ちを理解する、仲間と協同で作る、将来の夢や進路を考える、自分に自信を持つ、ということを書いています。結果は、役立つ、やや役立つがほとんどという高い満足度が出ていました。しかし、私はちょっとこの結果に疑問もありました。アンケートではそういう結果が出るけれども、実質的な教育効果はあったのだろうかということです。

それは、学びレポートの質的分析をすることによってわかりました。学びレポートというのは、大学での学びを大学生活につなげて考えるよう支援することが目的で、充実感や達成感だけでなく、なぜうまくいかなかったのかを分析を行う。学びの

根拠を論証させるということが目的だったのですが、この授業での学びレポートを見てみますと、内容の列挙とか、楽しかったとか、という記述が目立ち、適応プログラムが裏目に出ているという面も見られました。一方で初歩的なアカデミック・ライティングをきちんと習得した学生もいて、個人差が大きいということもよく分かりました。

また、私が担当している教育心理学や生涯発達心理学でも学びレポートを書かせています。学問を通して何を学んだかというのをレポートで書かせているのですが、そのレポートとは、明らかに差があつて、授業に埋め込まれた学問の思考、つまりディシプリンでの学習経験をきちんとレポートとして反映した学びレポートと初年次のレポートとは、異なる。当然なのですけれども、でもそこに問題を感じています。

その問題というのは、これまでの初年次教育の中にはやっぱりイニシエーションがなかったのではないかと。これまでというのは言い過ぎで、私が担当していた初年次教育ではなかったということ。つまり、スキル学習を取り入れ、ストレスを軽減する、楽しいイベント的な内容を取り上げる、それが面倒見がよい初年次教育として評価される。しかし、そうなのだろうか。学生の自立、成長を支援していくことになっているのだろうかということ。すなわち、大学生になるためのイニシエーションがないのではないかということです。イニシエーションとは、一人前の大人として社会に認められるための通過儀式ですが、そういった、何か難しいこと、難行苦行というようなことが、授業の中うまく盛り込んでいくことができなかったのではないかと。つまり

大学生になるためのハードルということを、初年次のときに認識できた学生とできない学生とは、その後の大学生活や、学問へどう導入させていくかということの理解度に違いが出てくるのではないかとことです。

アメリカの初年次教育の事例をみますと、ハーバード大学の初年次教育では、オナーズプログラムとして、教員の専門性に基づく学問を初年次からしっかりと導入し、学問への動機づけが重視されています。

日本の初年次教育のオナーズプログラムとしては東北大学の例があります。「大学での学びと転換」というGPを取っていて、私も2度ばかりシンポジウムにお招きいただきお話しする機会を得たのですけれども。それが東北大学出版会から二冊の本となつて出版されています。まず、『大学における学びの転換と学士課程教育の将来』。これは外部評価として行われたシンポジウムでした。二冊目は『大学における学びの転換と言語・思考・表現』ということ。これは考える力と書く力に焦点を当てたシンポジウムでした。この学びの転換というのは、東北大学では、まず入試で合格が決まった直後に、学生に一齐に、初年次のどの基礎ゼミを取りたいかというようなことを、郵送で聞くそうです。自分の専門とできるだけ遠い専門のゼミを取るようにと指導をしているそうです。そして、高校までの知識中心の定型的学習から、多様な解のある、大学での学びへと転換を図るといふ、専門での学習を高いレベルで要求する内容になっています。

さらに、学部横断的なクラス編成で、いろいろな学科の学生がそのゼミに集まってくる。幅広い教養を保証して、スキル学

習も授業に盛り込み、自立的な学習を重んじ、学問へと動機づけているという、研究大学における初年次教育の事例です。

私はこのデザインを、桜美林で二〇〇九年に実施した入学前教育に導入をしました。学問導入型の初年次教育の強化ということをしていくことは重要なのではないか、教養大学においてこそ、専門をどう教えていくかということを初年次プログラムの中に盛り込んでいくことが重要なのではないかと考えています。

教養と専門の重要性については、生涯発達心理学の授業においても活かしています。専門教養科目というと、専門と教養が混じっていて変だなあとお思いになるかもしれませんが、これは、enriched majorを国際基督教大学学長の絹川先生が当時訳されたもので、東大(当時)の金子元久先生は拡張型専門教育と訳しておられます。つまり、ディシプリンでの学習とアイデンティティの発達が重なるような構造を持つ授業を、専門を担当する教員がやっていくことが大学教育では重要だということです。

私は、授業では簡易版のラーニング・ポートフォリオを用いて、毎回書かせるということをやっています。それをもとに最後に学びレポートを書かせています。簡易版ラーニング・ポートフォリオというのは、A4用紙、たった一枚の裏表を使って二十九回分を書くことになっています。表面は細かい欄、裏面は少し太い欄になっています。毎回課題を出して課題内容にに応じて裏と表を使い分けて書かせています。

学びレポートでは、授業で学んだことから、つまりそれがディシプリンでの学習経験ということになるのですが、ディシプリ

ンで学んだ学習経験から問いを立てて、根拠を示し、筋道立てて自分の言葉で表現するという課題を課しています。

その授業を朝日新聞社が取材に来ました。今も、朝日ドットコムにアップされています。資料集にも掲載しました。山上浩二郎さんという記者の方が取材に来られました。山上さんは本当に現場の教員の取り組みに真摯(しんし)に耳を傾けて、的確に言葉を選んで発信してくださったと思います。「た」という過去形なのは、先日山上さんはお亡くなりになりました、ご病気で。非常に、残念に思っています。アップされている「山上浩二郎の大学取れたて便」には、私の授業だけでなく、ほかの授業もたくさん掲載されています。精力的に全国の大学を取材しておられますので、ぜひお読みいただけたらと思います。

その「大学取れたて便」に、拙著を引用してくださり、「井下は四年間の学士課程を通して書く力、考える力の重要性を強調する。著書から見ても『書く』という行為を通して、自分は何に関心があるのかを考え、自分が明らかにしたいこと、あるいは明らかにしたことは何かとか、自分が伝えたいことや主張したいことは何かなど、知識を自分に引き寄せて意味付けし直し、学んだこと、学んでいることを自分の言葉でいかに表現できるかというところにねらいがある。なぜならそこにこそ学びの本質があると考えるからである」ということを載せてくださいました。

私は、初年次教育だけに焦点を当てるのではなく、四年間を通じた学士課程教育のデザインが重要なのではないかと考えています。従って、「初年次教育から学士課程四年間へ」と、長いスパンで学生の発達を見通す、学生が現実を知り、自分を

り、自分の夢をデザインできるよう、社会を知り、しなやかに
 転換していけるよう、大学はその「足場作り」ということだと
 思います。初年次教育、専門教育、アイデンティティの発達も
 視野に入れた、まさしく「大学のデザイン力が問われている」
 ということだと思います。

制限時間となりました。図1の学士課程カリキュラム・マッ
 プについては、討論のところで、時間があればご説明したいと
 思います。ご清聴、ありがとうございました。

(いのしたちこ・桜美林大学基盤研究院心理・教育学系教授)

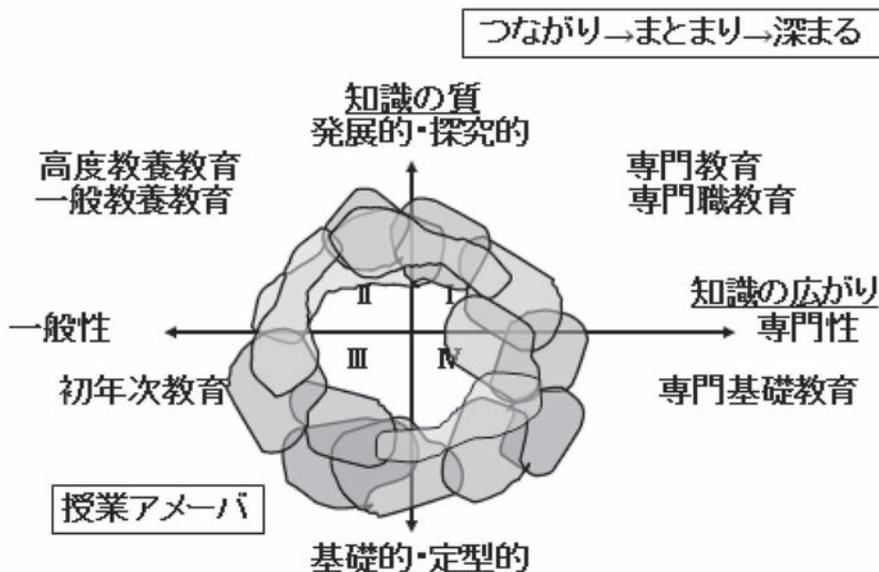


図1 学士課程カリキュラムにおける授業の連関 (井下, 2012)